

「時間的なありか限定性」をめぐって

On the Category of the Temporal Localization

呉 涵 涵

WU, Hanhan

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第44号 2017年11月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.44 2017

「時間的なありか限定性」をめぐって On the Category of the Temporal Localization

呉 涵 涵 WU, Hanhan

1. はじめに

A.В.Бондаркоによれば、〈時間的なありか限定性〉とは、動作の、時間軸のうえでの動作の位置づけの特定性／不特定性をとらえるカテゴリーである。動作が時間軸のうえで、ある時点や期間にくぎづけられていれば、その動作は時間的なありか限定をうけているのであるが、くぎづけられていなければ、時間的なありか限定をうけていないといえるのである。日本語には、〈時間的なありか限定性〉をあらわす体系的な文法的なシステムがないが、動詞のアスペクト的な形、すなわち完成相「する」「した」と継続相「している」「していた」がその表現に利用される。

〈時間的なありか限定性〉というカテゴリーは、日本語学では、まだ一部の研究者が注目しているにすぎない。〈時間的なありか限定性〉をひとつのカテゴリーとして記述している日本語の研究としては、A.В.Бондаркоによるロシア語の記述に影響をうけている奥田（1995）や、奥田の影響をうけているとみられる須田（1995）がある。また、日本語のアスペクト・テンス研究の中で〈時間的なありか限定性〉に言及しているものとしては、工藤（1995）がある。この論文では、これらの研究をとりあげ、〈時間的なありか限定性〉に対するアプローチのしかたについて検討する。

2. ボンダルコの研究とその流れにある日本語研究

2. 1 ボンダルコ（1987）¹

ボンダルコ（1987）は、まず〈時間的なありか限定性〉というカテゴリーが、次のようなたがいに対立する意味の統一体であると指摘する。1）時間の一方向的なながれのなかで、あるひとつの瞬間や時期への固定性の意味。2）非具体性・不特定性、すなわち、非制限的な反復性・習慣性、あるいは、時間的な一般性の意味。具体的にいえば、ボンダルコ（1987）は、まず〈時間的なありか限定性〉を、時間軸のうえにありか限定をうけている具体性をもつ動作の一回性・多回性と、時間軸のうえにありか限定をうけていない抽象性をもつ単純な反復性・習慣性・時間的な一般性に分類する。そして、ロシア語の〈時間的なありか限定性〉を表1のように分析している。

¹ ここで内容を紹介・引用する際に使用した日本語訳は、佐藤里美氏の翻訳にもとづいている。

表1 時間的なありか限定に関するボンダルコ (1987) の記述

時間的なありか 限定性の有無	下位分類	主体
ありか限定	具体的な一回性	具体的
	制限された多回性	具体的
非ありか限定	単純な反復性	具体的
非ありか限定	習慣性	主体の一般化が進んでいる
非ありか限定	時間的な一般性	一般的

ボンダルコによれば、時間的なありか限定をうけている動作には、〈具体的な一回限りの動作〉のほか、〈制限された多回性〉がある。この場合、動作は反復的なものであるが、その動作は具体的であって、時間のなかに限定されている。例えば、以下のような例である。

- 1) Я у них тогда два раза из-под самого носа уходил. (Ю. Герман) (そのとき、彼らのもとにいた私は、目のまえで二回、逃亡した。(Ю.ゲルマン))

〈一回性〉も、〈多回性〉も、テンス形式には、過去形も非過去形もあらわれる。また、アスペクト形式には、完成相と不完成相をどちらもあらわれる。そして、主体の具体性とむすびつくことが義務的である。

ボンダルコが規定する〈単純な反復性〉は、「具体的な事件のわくのなかでの、非習慣的な反復の動作」であり、例えば、例2のような動作である。〈単純な反復性〉の動作をあらわすとき、過去・非過去のテンス形式、完成相・不完成相のアスペクト形式のどちらもあらわれる。ここでも、具体的な主体とむすびつくことが義務的である。

- 2) Молча и неподвижно сидя у стены на соломе, Пьер то открывал, то закрывал глаза. (Л. Толстой) (ピエールは、わら壁のそばで、なにも言わず、じっと腰をおろしたまま、目をあけたり、とじたりしていた。(トルストイ))

ボンダルコが規定する〈習慣性〉は、類似の反復の見とおし（リアルな反復+可能な反復）を前提とする広い期間の経験の一般化されている動作である。テンス形式には過去・非過去、アスペクト形式には完成相・不完成相のいずれもがあらわれる。このタイプでは、具体的な主体のほか、なんらかのクラスの一般的な主体も可能になる。例えば、例3は具体的な主体、例4は一般的な主体である。

- 3) У меня есть странная особенность: я быстро схватываю в живом разговоре и поразительно тупа в чтении... (Ю. Нагибин) (私は奇妙な特徴をもっている。私は生きた会話ではすばやく理解するが、読書ではおどろくほどのものわかりがわるい... (ナギビン))
- 4) Счастливые люди не вызывают во мне зависти даже если они очень счастливы, ни раздражения, даже если очень довольны: вообще никогда не вызывают никаких дурных чувств. (Л. Гинзбург) (幸福な人びとが私にねたみを生じさせることはない。たとえ彼らがどんなに幸福であっても。[彼らが] どんなに満たされていて、腹立たしさをもよおすようなことはない。:一般に、どんな不愉快な感覚も、けっしてよびおこしたりしない。(グリーンズバーグ))

〈時間的な一般性〉は、場面の一般化のもっとも高い段階であると、ボンダルコは指摘する。このタイプの用例は、主にことわざや金言などである。このタイプは、アスペクト形式は完成相も不完成相もあり、一般的な主体とむすびつくことが義務的である。そして、ここで特に指摘しなければならないのは、ロシア語における〈時間的な一般性〉をあらわすとき、テンスは過去形を使うことが可能であるということである。この点は、日本語における〈時間的な一般性〉とは異なる。

- 5) Что с воза упало, то пропало. (荷馬車からおちた者はなくなった同然。(覆水盆にかえらず))

ボンダルコ (1987) は、ロシア語における〈時間的なありか限定性〉の研究ではあるが、日本語の〈時間的なありか限定性〉の記述にも大いに参考になる。次に、実際にボンダルコを参考にしてみるとみられる、日本語研究における〈時間的なありか限定性〉の記述をみる。

2. 2 奥田 (1995)

奥田 (1995) は、ボンダルコ (1987) にかなり忠実に、日本語の〈時間的なありか限定性〉を表2のように記述している。

表2 時間的なありか限定に関する奥田 (1995) の記述

時間的なありか限定性		テンス形式	アスペクト形式	主体
具体性		過去・非過去	完成相・継続相	具体的
抽象性	単純な反復性	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
	習慣性	非過去 (どちらかといえば)	完成相	主体の一般化が進んでいる
	時間的な一般性	非過去	完成相	一般的

奥田（1995）では、〈単純な反復性〉については、「かぎられた期間のなかで具体的な出来事がくりかえしおこなわれること」と規定する。かぎられた期間にくりかえされる出来事は、具体性をうけているいちいちの具体的な出来事とは、量のほかに違いがないようだが、反復の出来事は時間軸のうえにありか限定をうけていない。つまり、〈単純な反復性〉をもつ動作は、すでに時間の抽象化が始まっていると、奥田は指摘する。

以下は奥田があげる〈単純な反復性〉の用例である。

- 6) 一流の商社につとめ、多忙な日常で、たまの休日はゴルフにでかけるのでなければ、布団のなかで寝てしまう信利は、めったに父親と顔をあわせることがなかった。母親の方はときどき様子をのぞきにきて、信利のすきな料理をつくったときには、とどけにきていた。(恍惚の人)

〈習慣性〉も、反復的に発生する動作であるが、奥田（1995）の定義では、〈習慣性〉をあらわす動作は、条件さえあれば、おなじような出来事のくりかえしが発生する動作であり、そしてリアルな出来事だけではなく、ポテンシャルな出来事もふくみこんでいる。そのため、習慣的な出来事は、過去のなんらかの時期における、あるいは過去の全体にわたって、あるいは過去と現在とをふくみこむ、ひろい時間的な局面における恒常的な特性としてあらわれてきて、ひとりの人間、クラスに属する人間をタイプとして特徴づける。例7、8は奥田がとりあげる〈習慣性〉の例である。

- 7) 「なんだか涙もろくなっちゃって、すぐなくんですよ。それがとてもいやらしいので、主人も孫もよりつかないんです。気の毒になるやら、おかしいやら。」(恍惚の人)
- 8) 西洋のひとは個人主義がつよい。他人の領域にもたちろうとしないし、自分の私生活もかたくまもる。それでいて、共通の広場は愛する。個々の家や部屋は鍵でかたくとじるが、みんなが自然にあつまって、おなじ歌をうたい、おなじ考えをよろこびあう。共通の広場はかならずもつ。(天声人語)

〈習慣性〉では、主体の一般化が進んでいる。例8の「西洋のひと」のような主体は、具体的な主体でもなく、「人間」のような完全に具体性を失う主体でもない。このような主体は時間的な、あるいは空間的な制限をうけていて、具体的な唯一的な主体の集合である。

〈時間的な一般性〉は、出来事の時間的な一般化であり、脱時間的な、あるいは全時間的な、抽象化のもっとも高い段階だとする。〈時間的な一般性〉をもつ文の対象的な内容は、主に恒常的な法則を表現している判断やことわざなどである。この場合、はなし手は人類の経験の代弁者になるが、はなし手自身の視点や考え方も保たれている。日本語における〈時間的な一般性〉は、主体の

一般化が義務的であり、客体が存在すれば、その一般化をもともなうと奥田は指摘する。テンス・アスペクト形式は完成相の非過去のかたちをとる。例9は〈時間的な一般性〉をあらわす例である。

- 9) サケ、マスは成魚として川をさかのぼって、上流で産卵し、稚魚は川に一二年とどまって、海にくんだり、海で成長をとげ、親魚として川をさかのぼる。(天声人語)

以上が、奥田(1995)による日本語の〈時間的なありか限定性〉についての記述である。奥田(1995)は、ボンダルコ(1987)をもとにしているため、分類の枠組みはほぼ同じである。ただし、ボンダルコ(1987)の時間的なありか限定をうけている〈制限された多回性〉については、奥田(1995)はふれていない。また、ロシア語では、〈時間的なありか限定性〉によってテンス・アスペクト形式に制限がないのに対して、日本語では、時間の抽象化が進むと、過去形や継続相が使用されなくなるという違いがあることがわかる。

なお、奥田(1995)は、〈単純な反復性〉については、ボンダルコ(1987)の〈単純な反復性〉の名前と定義を借りているようであるが、説明に使用する例は、ボンダルコ(1987)の使用する〈単純な反復性〉の例とは一致していない。ボンダルコの例2と奥田の例6を比較したい。

- 2) Молча и неподвижно сидя у стены на соломе, Пьер то открывал, то закрывал глаза. (Л. Толстой) (ピエールは、わら壁のそばで、なにも言わず、じっと腰をおろしたまま、目をあけたり、とじたりしていた。(トルストイ))
- 6) 一流の商社につとめ、多忙な日常で、たまの休日はゴルフにでかけるのでなければ、布団のなかで寝てしまう信利は、めったに父親と顔をあわせることがなかった。母親の方はときどき様子をのぞきにきて、信利のすきな料理をつくったときには、とどけにきていた。(恍惚の人)

例6のような頻度をあらわす副詞が使われている例は、奥田に限らず、日本語研究では〈反復性〉の典型例と見なされるものだが、ボンダルコは、「具体的な事件の枠のなかでの、非習慣的な反復の動作」という定義に従って、例2のようなものを〈単純な反復性〉の典型例としているようである。ただし、ボンダルコは、頻度副詞が使われている例は、〈時間的な非ありか限定性〉の範囲に入れるが、〈単純な反復性〉に入れるかどうかははっきりいっていない。逆に、奥田が例2のような例を〈単純な反復性〉に入れるかどうかは不明である。

2. 3 須田 (1995)

須田 (1995)²は、ボンダルコにも奥田にも影響をうけているとみられる。須田の研究の特徴は、時間的なありか限定をうけている動作を次のようにより詳しく分類していることである。

- (1) 具体的な一回かぎりの動作 (唯一性) 「太郎はいま本をよんでいる」
- (2) 総計的な回数性 「太郎はおなじ本を二回よんだ」
- (3) 集合的な回数性、
 - a) 多重的な回数性 「太郎はとんとん太鼓をたたいていた」
 - b) 分配的な回数性 「太郎は本棚からつぎつぎに本をとりだしている」
- (4) 作業 「太郎は朝から論文をかいている」

須田の〈総計的な回数性〉は、ボンダルコの〈制限された多回性〉に対応するようであるが、須田の〈集合的な回数性〉に対応するものは、ボンダルコの分類にはない。

また、時間的なありか限定をうけていない動作については、次のように分類している。

- (1) 単純な反復性 「太郎は毎日本をよんでいる」
- (2) 習慣性 「太郎はむずかしい本をよむ」 (《活動》 「太郎は職業として本をよんでいる」)
- (3) 時間的な一般性 「人間は本をよむ」

この三分類は、奥田と同じ枠組みであるとみられる。

表3は、須田 (1995) による〈時間的なありか限定性〉の分類とテンス・アスペクト形式や主体との関連をまとめたものである。

² 須田による〈時間的なありか限定性〉の記述は、須田 (2010) にも、みられる。そこでは、〈時間的なありか限定性〉という用語は使用されず、〈時間的な具体・抽象性〉とよばれている。〈時間的な位置づけ (テンス・パーフェクト・アスペクト体系)〉から区別するためであるという。また、〈総計的な回数性・集合的な回数性〉は、〈回数性〉として、〈時間的な具体・抽象性〉から区別され、アスペクチュアリティの周辺に位置づけられている。なお、〈反復性〉は、〈回数性〉とともにアスペクチュアリティの周辺に位置づけながら、〈時間的な具体・抽象性〉にも残されている。

表3 時間的ありか限定に関する須田(1995)の記述

時間的ありか限定性の有無	下位分類	テンス形式	アスペクト形式	主体
時間的ありか限定をうけている場合	具体的な一回性	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
	総計的な回数性	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
	集会的な回数(多重;分配)	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
	作業	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
時間的ありか限定をうけてない場合	単純な反復性	過去・非過去	完成相・継続相	具体的
	習慣性	非過去(過去は特殊)	基本は完成相(〈活動〉は完成相と継続相の両方が可能)	具体的な主体あるいは広げられた具体的な主体
	時間的な一般性	非過去形	完成相	一般的な主体

さらに、須田は、動作の抽象化が進行するとともに、アスペクト形式のテキスト機能も変わっていくことを指摘している。もっとも具体性の高い一回的な動作では、アスペクト形式はほかの動作との間の同時性・継起性をあらわすタクシスの機能をもっている。抽象化が進んでいくと、タクシスの機能は弱くなり、〈時間的な一般性〉になると、タクシスの機能を完全に失う。

では、須田(1995)による〈時間的ありか限定性〉の下位分類についてやや詳しくみていく。

1) 具体的な一回かぎりの動作

須田(1995)は、具体的な一回かぎりの動作をさらに〈あからさまな時間的ありか限定性〉と〈ほのめかされた時間的ありか限定性〉に分ける。前者は、時間軸上への動作のくぎづけのモメントや期間が、明確に示めされているばあいである(例10)。一方、〈ほのめかされた時間的ありか限定性〉は、動作のくぎづけされる時間のモメントや期間がただほのめかされているだけのばあいである(例11)。

10) 八時半に駅へ行った。(めし)

11) 『『東日』の月評を読んだか?』と私にいった。「うん、読んだ。」(同時代の作家たち)

2) 総計的な回数性

〈総計的な回数性〉をあらわす動作は、おなじ質をもつ動作の、限定的にくりかえされる回数の総計を指し示す(須田1995: 4)。主体の単数と複数により、二種類に分けられる。

a) 個別的な主体の動作のばあい

12) 「あら、私も、二、三度、中川さんの夢を見ましたわ。(茶色の眼)

b) 複数の主体や客体をもつ動作のばあい

13) 十一時に店を閉めた。ほかには客が一人もなく、かあさん夫婦も女たちも寝ついた。そこで岸がが「やろう」と云いだした。(青べか物語)

3) 集合的な回数性

ボンダルコ(1987)や奥田(1995)には、〈集合的な回数性〉にあたるものがない。須田は、〈集合的な回数性〉をさらに〈多重的な回数性〉と〈分配的な回数性〉に分けている。例14、15は、それぞれ〈多重的な回数性〉と〈分配的な回数性〉の例である。

14) 足もとの水がちゅちゅと鳴った。(松葉牡丹)

15) 一時に丁度十五分前、彼はいきなり大声をあげて、ビラをカ一杯、そして続け様に投げ上げた。(党生活者)

前者は、くりかえされるそれぞれの動作の参加者が同一であるもの、後者は、反復されるそれぞれの動作における参加者のセット、すなわち、主体と客体が、同一であり、かつ、完全には同一でないものと説明されている。

4) 作業

〈作業〉も、須田(1995)が独自にとりあげているカテゴリーであり、例16がその例である。

16) 今論文を書いている。大論文を書いている。中々それどころじゃない。(三四郎)

これは一見、具体的な動作のようだが、その動作の過程が連続的につづいていないこともありうる。不連続につづいている一連の動作の過程が、全体としてひとつの動作をなしている。

5) 単純な反復性

以下は、時間的なありか限定をうけていないばあいである。すでにのべたように、須田の〈単純な反復性〉は、基本的に、奥田のそれと用語も内容も同じものであると考えられる。須田はこれを「単純な反復性を表す動作は、不特定回数くりかえされる動作が、全体としてひとかたまりの動作をなしてはならず、それぞれの動作が異なる期間に生じていて、複時間的polytemporalなものである」(須田1995: 12)と説明している。

以下は、須田 (1995) がとりあげる〈単純な反復性〉の用例である。

- 17) しかし私は、市民に復帰するのだと念じて昂揚していたから、母親に昼食代の小銭を貰って毎日その社に出かけた。(怪しい来客簿)
- 18) 毎日君は蕎麦畑の下の墓にばかり参ってるそうだね。(雪国)

須田 (1995) は、〈時間的なありか限定性〉をあらわす表現手段の特徴についても詳しく説明している。単純な反復性をあらわす表現手段は、以下の三種類があるとする。

- ①動作の複時間的なくりかえしを表すさまざまな状況語 (最も重要な手段) (毎日、毎年、ときどき、ときおり、ときに、たまに、まれになどの状況語)
- ②場所を表す状況語、特に、そのとりたての形 (風呂では、家ではなどの状況語)
- ③分析的な述語 (したものだ; すること (時、場合) がある (あった))

なお、須田がとりあげる用例には、具体的な事件の枠のなかに制限されている動作と制限されていない動作の両方があるようである。例17、18は後者の例であったが、前者の用例としては次のようなものがあがっている。これはボンダルコの例2に対応するものである。両者は具体性において異なっているようにも思われる。

- 19) 三四郎は飯も食わずに、仰向に天井を眺めていた。時々うとうと眠くなる。(三四郎)

6) 習慣性

須田 (1995) の〈習慣性〉は、基本的には、ボンダルコや奥田のものと同じであるが、記述がはるかに詳しい。須田は、これを「より進んだ時間的な抽象性は、習慣性である。習慣性を表す動作は、単純な反復性を表す動作と異なり、具体的なエピソードと具体的な (具体的に観察される) 反復の枠からとび出しているものである」(須田1995: 18) と定義している。そして、〈習慣性〉の主体の特徴については、「単純な反復性と同様、具体的な主体の世界の中に入りきる動作の領域にあるため、主体は、唯一的、個別的人や物である」(須田1995: 18) と指摘する。ただし、主体は、唯一的なものをとびだしているばあいもあるが、あくまでも、その具体性を失ってはいないとする (つまり、時間的な、あるいは、空間的な制限性に縛られている)。例20は個別主体の例、例20は唯一的なものをとびだしている例である。

- 20) 「君の旦那さんは飲むんだね。」

「飲んで困ります。」(雪国)

- 21) 次に大通から細い横町へ曲って、平の家と云う看板のある料理屋へ上がって、晩飯を食って酒を呑んだ。其処の下女はみんな京都弁を使う。甚だ纏綿している。(三四郎)

〈習慣性〉では、アスペクト形式は基本的に完成相であるという指摘は奥田と同じである。

さらに、〈習慣性〉をあらわす動作の特徴についてタイプ化していることも須田(1995)の特徴である。例えば、「典型となる習慣的な動作は、主体の恒常的な内的ファクターがそれをひきおこすばあい、主体の質的な性格づけとなる」ばあいとして、例20をあげる。そのほかのタイプとしては、「くりかえしおこなわれる、主体の、あるふるまいの例示的なさしだしによる主体の性格づけ」や「くりかえしおこる動作の、量的な側面における評価やつよさの程度における評価による主体の質的な性格づけ」「主体の能力や可能性による人や物の質的な性格づけ」「人と人との関係による性格づけ」がとりあげられている。非常に重要な記述であると思われる。

7) 習慣性における〈活動〉

須田は、〈習慣性〉の特殊なものとして、〈活動〉があることを指摘している。〈活動〉とは、社会活動や余暇活動などのような、人間が精神的な欲求の満足を志向する動作である。このような動作は、〈単純な反復性〉と〈習慣性〉との中間的な領域に位置しているといえる。

- 22) お前は芝居なんかやっとるそうだが、それはいかん。やめろ。(幸福の限界)

8) 時間的な一般性

〈時間的な一般性〉は、動作の一般化の最高の段階であり、ことわざ、格言、恒常的な法則性などについての文に、動作の最高の一般化があらわれると須田は指摘する。〈時間的な一般性〉では、動作の主体は常に一般化されている。もし客体をもつ動作のばあいであれば、客体も一般化されている。テンス形式は非過去であり、アスペクト形式は完成相である。

- 23) 人間は誰しも幸福を求める。(幸福の限界)

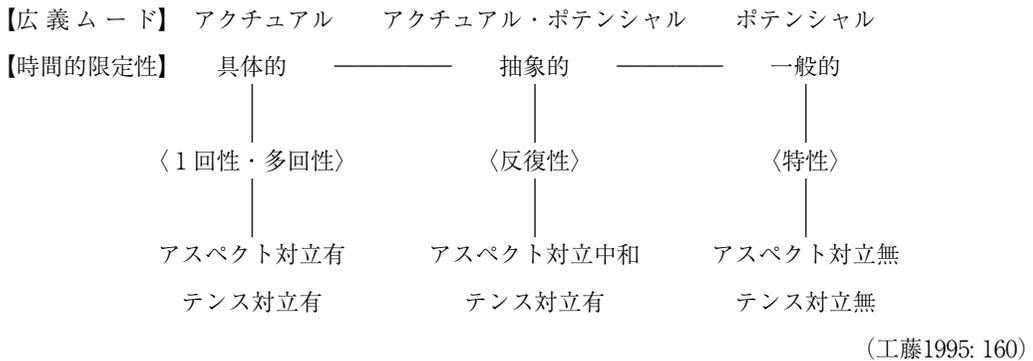
- 24) ねえ、君、先だって、或る婦人雑誌で、僕の家庭によく似た小説の審判を、読者から解答を求めていたんでね、ちょっと、興味を誘われて、読んだんだ。君、読者つてものは、それぞれの生活環境で、自分の視野だけで、審判しているんだ。(茶色の眼)

須田(1995)をボンダルコ(1987)や奥田(1995)と比べれば、時間的なありか限定をうけている具体性の動作の記述が非常に詳しい。また、〈時間的なありか限定性〉の表現手段の特徴も全面

的に詳しく記述されている。主体やテンス・アスペクト形式だけではなく、状況語や述語形式なども視野に入れている。用例も多く、タイプ化も詳しい。

3. アスペクト・テンス研究における時間的限定性 (工藤1995)

〈時間的ありか限定性〉の考え方を、アスペクト・テンス体系の記述のなかに取り入れている研究として、工藤 (1995) がある。工藤 (1995) では、〈時間的ありか限定性〉は〈時間的限定性〉とよばれ、一回性・多回性 (具体的)、反復性 (抽象的)、特性 (一般的) に分類されている。この三分類は、広義ムードやアスペクト・テンス対立の有無と次のように相関している。



3. 1 一回性・多回性 (具体的)

工藤は、具体的な事象として〈一回性〉と〈多回性〉を認め、〈多回性〉と〈反復性〉との相違については、「〈多回性〉は、〈運動の複数性〉の点では、〈反復性〉と共通するが、同時に、〈一回性〉と同様に、時間的限定性のある (具体的時間に釘づけされた)、アクチュアルな運動を捉えているものである。従って、スルは、テンス的に〈現在〉を表せない。(「何度でも来ます」は〈未来〉である。)」(工藤1995: 152) とのべている。これは、〈多回性〉を〈一回性〉と同じく具体的とみる理由でもある。

用例25と26は、工藤 (1995) がとりあげる〈多回性〉の例である。

- 25) この4、5日は、当地へ来た頃よりも少し温かい日が続いて喜んでいたら、ゆうべはまた急に冷えて、夜中に便所へ3度も行きました。(夕べの雲)
- 26) 「母さん、大丈夫よ。わたし、また魚津さんをお連れして一緒に来ますよ。」
「まだ、僕も何回も来ますよ。」(氷壁)

工藤 (1995) の〈多回性〉は、ボンダルコ (1987) の〈制限された多回性〉や須田 (1995) の〈総

計的な回数性)にあたるとみられる。

3. 2 反復性

工藤(1995)は、アスペクトのスル形式とシテイル形式が完成性と継続性という基本的な意味をあらわすほか、〈パーフェクト性〉や〈反復性〉のような派生的な意味をあらわすことがあると指摘する。以下は工藤(1995)がとりあげる〈反復性〉の用例である。

27) 「よく行くのかい？」

「大概行っていますよ。」(暗夜行路)

28) 「一番だって言ったって、浪人してるじゃないか」

瞬間、増田は小林に飛びかかって行った。兄の悪口を言われると、増田はいつも別人のように憤った。(夏草冬濤)

工藤(1995)の〈反復性〉は、奥田(1995)や須田(1995)の〈単純な反復性〉にほぼ対応するとみられる。

さらに、工藤(1995)では、時間的抽象化=ポテンシャル化の程度によって、〈反復性〉にはいくつかのバリエーションが存在することを認めている。

- (1) 反復の期間の短い場合よりも、期間が長い方が、よりポテンシャル
- (2) もはや運動の実現の可能性が閉じざされている過去の場合よりも、今後も実現の可能性のある現在の方が、よりポテンシャル
- (3) 個別主体の場合よりも、主体の一般化された場合の方が、よりポテンシャル
- (4) 不規則的反復の場合よりも、規則的反復の方が、よりポテンシャル

(工藤1995: 156)

3. 3 特性

工藤(1995)では、時間的な抽象性の最も高い段階を、〈一般性〉ではなく、〈特性〉とよび、次のような例をあげている。

29) 身長は私より少し低いぐらいで、上手な英語を話します。間違いありませんか。(ドナウの旅人)

30) だけどおれはセゴビアが一番気にいったね。あいつは凄く旨く弾くよ。(変奏曲)

31) あらゆる作家は、自分のことを書くよ。自分を書かない作品を書いても、楽しくないから

ね。(砂糖菓子が壊れるとき)

32) こどもは乳を飲む。おとなは酒を飲む。どちらも人間を大きくするものだ。(項羽と劉邦)

奥田や須田の分類との関係でいえば、工藤の〈特性〉は、奥田や須田の〈習慣性〉と〈一般性〉を合わせたものになっているとみられる。これは、〈一回性〉と〈特性〉を両極とし、中間に〈反復性〉があって、両者をつないでいるという連続性にもとづく見取り図を描いているためであると考えられる。前の節で、工藤が、時間的抽象化=ポテンシャル化の程度によって、〈反復性〉にはいくつかのバリエーションが存在することを認めていることを紹介したが、これも連続性の考え方にもとづくものである。

4. 先行研究の比較から見えてくる問題点

以上、〈時間的なありか限定性〉にかかわる代表的な先行研究をとりあげ、それぞれの記述を概観した。以上にとりあげた日本語の〈時間的なありか限定性〉についての研究の原点はボンダルコの研究にあり、そのため、基本的な考え方は共有されていると思われるが、実際の記述においては重要な相違点もあるようである。ここでは、それらを確認し、どのような問題点があるかを指摘する。

4. 1 用語の問題

〈時間的なありか限定性〉という用語は、ボンダルコ (1987) の〈Временная локализованность〉を直訳したものであり、奥田 (1995) や須田 (1995) がこれを用いている。なお、須田 (2010) では、これを〈時間的な具体・抽象性〉とよびかえているが、それは、「時間的な位置づけ」(テンス・パーフェクト・アスペクト体系) と区別し、出来事に内在する時間的な性格であることをきわだたせるためであるという。

また、工藤 (1995) は、〈時間的なありか限定性〉ではなく〈時間的限定性〉を用いている。工藤 (1995) の〈時間的限定性〉は、具体的・抽象的・一般的の区別である。その後、工藤の関心は、〈時間的限定性〉の観点からの述語の意味的なタイプの分類 (運動、状態、存在、特性、関係、質など) に移るが、そこでは、〈具体性・抽象性〉よりも〈一時性・恒常性〉の観点が中心になっているようである。ただし、用語としては、ともに〈時間的限定性〉を使用している。一方、奥田 (1995) では、述語の意味的なタイプにあたるものを「対象的な内容による文の分類」として、〈時間的なありか限定性〉から区別している。また、須田 (2010) では、〈時間的な具体・抽象性〉の記述の最初のところで、述語の意味的なタイプをとりあげており (須田2010: 103)、工藤と同じく、両者を同じカテゴリーと考えているようである。

このように、〈時間的なありか限定性〉と〈時間的限定性〉のいずれを用いるかということは、

単なる用語の問題を越え、〈具体性・抽象性〉と〈一時性・恒常性〉の関係をどう捉えるかという問題にも関係しており、深刻である。また、これらの用語のもとに、述語の意味的なタイプをどのように扱うかという問題もあり、検討が必要である。

4. 2 テンスとの関係

奥田(1995)では、〈単純な反復性〉の場合には、過去形も非過去形をとり、〈時間的な一般性〉の場合には、非過去形になると指摘するが、〈習慣性〉の場合については、「どちらかといえば非過去形を使う」としていて、やや曖昧である。

この点については、須田(1995)が詳しくのべている。須田は、〈習慣性〉とテンスの関係について以下のように説明している。

習慣性をあらわす動作は、単に具体的な主体を質的に性格づけているだけで、それ自体は時間軸との関係をなんらしめしてはいない。そのような動作が時間軸と関係をもつようになるのは、具体的な主体をとおしてである。具体的な主体は、まさに、それが具体的であるために、ある一つの時間の平面のなかに存在する。つまり、習慣性をあらわす動作において、時間軸と関係しているのは、主体の動作ではなく、その主体の存在であるといえるだろう。そして、具体的な主体の存在は、現在に属するか、過去に属するか、未来に属するかの、どれかでしかありえない。現在に属し、同時に、過去に属するということはないのである。たとえば、現在いきている人は、もちろん発話の瞬間だけいきているわけではなく、過去にもいきていたのだが、その存在は現在に属する。逆に、その存在が過去に属する人とは、すでにしんでしまって、現在はいきていない人のことである。

(須田1995: 19)

つまり、須田は、〈習慣性〉は基本的に非過去形を使用するとしている。「彼は、むかし、酒を飲んだ。」のような現在時に存在する主体の過去の習慣的な動作をあらわす場合もありうることにについては、須田は、「彼は、むかし、酒を飲んだ」という表現より、「彼は、むかし、よく酒を飲んでた。」のような、〈反復性〉をあらわす「よく」などの副詞をつけ、そして、完成相を継続相にかえた方がより自然である、と指摘している。つまり、現在時に存在する具体的な主体の過去の習慣をあらわそうとすると、習慣的な動作は〈反復性〉に近づいていくのである。

工藤(1995)では、テンス対立の有無によって、〈一回性・多回性〉〈反復性〉と〈特性〉を分ける。〈一回性・多回性〉と〈反復性〉にはテンス対立があるが、〈特性〉になると、テンスの対立がなくなるとしている。〈特性〉は、〈習慣性〉と〈時間的な一般性〉に対応するので、工藤は、〈習慣性〉にはテンス対立がない(非過去形のみ)とみていることになるかもしれないが、〈反復性〉と〈特性〉は連続的であるとみているので、テンス対立の有無に関しても、明確な線引きはできな

いだろう。

〈習慣性〉におけるテンスの問題は、須田の問題提起をうけて、さらに検討が必要だろう。

4. 3 アスペクトとの関連

奥田 (1995) は、〈単純な反復性〉では完成相と継続相の両方が使用され、〈習慣性〉と〈時間的な一般性〉では完成相のみを使うと指摘しているが、須田 (1995) では、〈習慣性〉をあらゆる動作はやはり基本的に完成相を使うとしながらも、〈活動〉のばあいには、例外的に、完成相と継続相の両方を使用することができるとしている。これに関連する指摘は工藤 (1995) にもあり、〈職業〉をあらゆる場合は、非アクチュアル性が強く、特性規定的であるが、継続相に限定されるとしている。例33は、須田の〈活動〉の例、例34は、工藤の〈職業〉の例である。

33) ねえ、今度、国電に乗ったら、切符を持ってきて。あたし貯めてるのよ。(怪しい来客簿)

34) 「大学で生物学を教えているのです。」(北都物語)

工藤の〈職業〉と違い、須田の〈活動〉は、〈職業〉のほかに、社会活動や余暇活動などのような、人間が精神的な欲求の満足を志向する動作も含められている。習慣性における継続相の例外的な使用については、さらに精密な記述が必要であろう。

アスペクト形式と〈時間的なありか限定性〉との関連については、タクシスも重要である。工藤 (1995) では、アスペクトのテキスト的機能、つまりタクシスが注目されていて、基本的アスペクト対立 (完成性と継続性) において、〈継起性〉と〈同時性〉のタクシスを認めている。また、〈反復性〉については、「時間的限定性が抽象化しているので、完成性、継続性、パーフェクト性とは、異なるテキスト機能をもつことになる。他の出来事との外的時間関係 (タクシス) において、具体的なアクチュアルな出来事に対する〈背景的説明性〉となることが特徴的である」(工藤1995: 150) と指摘する。次は、その用例である。

35) 「兄さん、いらっしゃい」

とお延は正太に挨拶した。従兄妹同志の間ではあるが日ごろ正太のことを「兄さん、兄さん」と呼んでいた。(家)

須田 (1995) でも、タクシスが注目されていて、動作の抽象性が高くなるとともに、同時か継起か、先行か後続かといったタクシス的な機能も弱くなり、動作の抽象性が高くなるほど高い段階である〈時間的な一般性〉になると、タクシス的な機能が完全に失われるとしている。ただし、タクシス的な機能が弱くなるということのみが注目されていて、〈背景的説明性〉のようなテキスト的機能

については言及がない。

こうした工藤と須田の指摘は、〈時間的なありか限定性〉とテキスト的機能の相関をのべたものとして、非常に重要である。

4. 4 主体との関係

表2、表3に示したように、奥田（1995）と須田（1995）とは、〈時間的なありか限定性〉と「主体の具体性・一般性との関係の記述は、基本的には同じであるが、詳しくみれば、気になる点がないわけではない。それは〈習慣性〉の主体についてである。奥田は、〈習慣性〉の主体では一般化が進んでいるとのべているが、須田は、広げられることがあることを認めつつも、〈習慣性〉の主体は具体的であるとのべている。もっとも、奥田は、「『西洋のひと』のような主体は、具体的な主体でもなく、「人間」のような完全に具体性を失う主体でもない。このような主体は時間的な、あるいは空間的な制限をうけていて、具体的な唯一的な主体の集合である」のようにのべており、具体的でないとはいっていない。

工藤（1995）でも、〈反復性〉と〈特性〉規定との連続性をみる際に、ポテンシャル化の度合いをはかる観点のひとつとして、主体の一般化に注目していた。

4. 5 時間的なありか限定性の表現手段

ロシア語においても、日本語においても、〈時間的なありか限定性〉を表現する体系的な文法的なシステムがないのであるが、主体、動詞のテンス・アスペクト形式、「することがある」などの述語形式、そして状況語など、様々な手段が〈時間的なありか限定性〉にかかわっている。

こうした〈時間的なありか限定性〉の表現手段をもっとも詳しく記述しているのは、須田（1995）である。須田（1995）では、動作の複時間的なくりかえしをあらわすさまざまな状況語（ときどき、よく、毎日）と場所をあらわす状況語（家では、風呂では）は、〈単純な反復性〉をあらわす重要な表現手段であると指摘する。また、〈習慣性〉をあらわす際、動詞の条件節が大きな役割をはたすと記述する。例えば、「はにかみ笑いをすると、えくぼが出る」のような例である。

しかし、述語形式については、まだ記述が十分でない。「したものだ」「すること（とき、場合）がある」などの記述はまだ少ない。

5. おわりに

以上、ボンダルコを出発点とし、その流れにあるとみられるいくつかの研究を対象として、〈時間的なありか限定性〉にかかわる先行研究を検討してみた。それらの研究は基本的な部分で考え方や観点を共有しながらも、用語の問題に始まり、様々な異なりを有していた。このカテゴリーの重要性に気づいている研究者はまだ少なく、研究する余地は大いに残されている。筆者は、動詞研究

の今後の主要な課題のひとつとして、多くの研究者が〈時間的なありか限定性〉の研究に取り組む必要があると考えている。

<参考文献>

- 奥田靖雄 (1995) 「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』 2・22、むぎ書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房.
- 須田義治 (1995) 「時間的なありか限定性」『日本語学科年報』 16、東京外国語大学.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論—形態論的なカテゴリーと構文論的なカテゴリーの理論—』 ひつじ書房.
- A.B.Бондарко (1987) Временная локализованность // Теория функциональной грамматики: Введение. Аспектуальность. Временная локализованность. Таксис. Л. (佐藤里美訳「時間的なありか限定性」『機能文法の基礎—序説・アスペクチュアリティー・時間的なありか限定性・タクシス—』)

付記

ボンダルコの文献については、お許しを得て、佐藤里美先生の日本語訳を参照させていただきました。記して感謝申し上げます。